

# 蚕糸功績賞

國見 裕久

## 功績概要

氏は、昭和52年4月に東京都蚕糸指導所に入都以降、カイコを含むチョウ目昆虫の病理学的研究に従事した。東京都蚕糸指導所では、消石灰水、グルタルアルデヒド、塩化ベンザルコニウムを主成分とするホルマリンに代わる蚕室蚕具の消毒剤を開発した。また、八丈島で大発生していた桑害虫クワゴマダラヒトリの病理生態学的研究を展開し、化学農薬に代わる蚕に無毒の核多角体病ウイルスを利用した本種の防除法を確立した。この業績に対して、東京都知事技術表彰及び日本応用動物昆虫学会賞を授与された。

東京農工大学に移動後も主にチョウ目昆虫とその病原ウイルスとの関連に関する研究を展開し、オス特異的な致死を引き起こす“オス殺し”をチャハマキで発見し、その原因因子がパルチチウイルス科のウイルスであることを世界で初めて明らかにし、本ウイルスを *Osugoroshi virus* と命名した。

平成13年以降、東京農工大学大学院連合農学研究科長、農学研究院長、農学府長、農学部長、理事・副学長を歴任し、本学における蚕学を含む農学教育と学生支援に関する計画立案、実施体制の確立に尽力した。

また、学界においては日本学術会議連携会員、日本学術会議応用昆虫分科会副委員長、日本農学会評議員、日本応用動物昆虫学会会長など、数多くの委員に就任し、蚕糸学会を含む応用昆虫学に関連した学会の発展に大きく寄与した。

さらに、農林水産省、環境省、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構などにおいて多数の委員に就任し、農林水産分野の研究プロジェクトの審査・評価を実施し、蚕糸関係の研究を含む農林水産関連の研究の進展に大きく貢献した。

大日本蚕糸会においても、平成30年から評議員、同31年から蚕糸褒賞等選考委員として、業務運営に貢献している。

以上のように氏は、蚕糸絹業の振興発展、蚕糸絹文化の向上に貢献し、特に功績顕著と認められる。

# 蚕糸功績賞

高林 千幸

## 功績概要

氏は、東京農工大学工学部に在籍以来、半世紀に亘り製糸技術研究業務及び蚕糸に係る博物館活動に従事した。

製糸技術研究業務では、製糸工程の計測制御管理技術関係で、製糸工程管理を行うためのデバイスの開発及び繭の煮熟状態の計測管理手法の開発、さらに製糸工程のエキスパートシステムの共同開発がある。これらの業績により日本蚕糸学会蚕糸学進歩賞、貞明皇后蚕糸技術賞を授与された。また、シルク新素材関係で、ハイブリッドシルクを開発し、シルクの洋装面への需要拡大に寄与した。その後、ネットロウシルク、布団綿用シルクウェーブ・シルクフィルやシルクシェルを開発し実用化した。さらに、シルク素材による人工血管・人工皮膚等の医療用素材などを開発し、これら一連の研究について繊維学会賞、日本蚕糸学会賞、日本シルク学会賞、貞明皇后蚕糸技術賞・同科学賞を授与された。

蚕糸に係る博物館活動では、平成23年に岡谷蚕糸博物館館長に就任し、博物館の移転を機に博物館に民間の製糸工場を併設することに尽力し、製糸の歴史や技術をわかり易く伝えることのできる市と民間との協働による類まれな博物館に再編した。また、子供達へのカイク学習を行い、蚕糸絹文化の次世代への継承に注力した。令和6年には、開館60周年・リニューアル10周年記念式典及び記念講演会を企画・開催した。

これまで氏は、大日本蚕糸会蚕糸科学研究所研究アドバイザー、日本蚕糸学会編集委員、日本シルク学会編集委員・同常任委員・同副会長などを歴任し、平成25年から9年弱日本シルク学会会長を務め、蚕糸関係の学術活動、社会活動に広く貢献した。

大日本蚕糸会においても、蚕糸絹文化活性化推進事業審査会委員、蚕糸絹業提携確立技術・経営コンクール審査会委員、蚕糸褒賞等選考委員会委員として、業務運営に貢献した。

以上のように氏は、我が国の蚕糸業とりわけ製糸及びシルク新素材に関する技術開発を行うとともに、蚕糸絹文化の継承・発展に貢献し、その功績は顕著なものと認められる。